

〈提 題〉

『命題論』註解と動詞論の変遷

——プラトンからオッカムまで——

古 館 恵 介

1 プラトンとアリストテレス

エミール・バンヴェニストは動詞を「完結した平叙的言表の構成に不可欠な要素」と定義している。この定義はそれまでのヨーロッパの動詞論において主として提唱されていた二種類の定義、「動詞は過程 (procès) を、名詞は対象 (objet) を示す」という定義と、「動詞には時称があるが、名詞には時称がない」という定義を刷新するものである¹⁾。すなわちバンヴェニストは名詞と動詞を区別するにあたって、「表示」とは次元の異なる性格、文を構成する「機能」(fonction) や「能力」(capacité) とでも呼ぶべき性格を指標にしているのである。そしてある時期までのアリストテレス『命題論』への註解もその性格を「力」(vis) と呼んで特別の注意を払っていたが、その言葉は定着せずに消えていった。そしてその各転機に「翻訳」が何らかのかたちでかかわっていたのである。

語を名詞 (ὄνομα, nomen) と動詞 (ῥήμα, verbum) に区別し、その両者が結合して文が成立するという文法的な考察を最初に示したのはプラトンである。プラトンは『ソピステス』(261d-262e)において、名詞は「行為する当の者」あるいは「事物」(πρᾶγμα) を表示し、動詞は「行為」(πρᾶξις) を表示し、この両者が結合することで文が成立するとしている。このプラトンの動詞論は、少なくとも定義においては「表示」を指標にしていると言っていいだろう。

次にアリストテレスは『命題論』において、「動詞は時間を併示する表示的音声であり、その部分は全体から切り離されると何ものをも表示し

1) バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』146-149頁。

ない」(16b6)と定義した。この定義は時間の「併示」(προσημαίνειν, consignificare)を指標にするものであるが、語の構成からして、広い意味では「表示」(σημαίνειν, significare)を指標にしていると言うこともできる。しかし『命題論』中の「またそれは常に他のものについて述語づけられるものの印である」²⁾や「すべての命題文は動詞もしくは動詞の変化形からできていなければならない」³⁾などの発言は、平叙文を成立させる動詞に固有の機能を示していると考えることができる。その機能は後に『命題論』註解において「力」と呼ばれることになった。

2 ポエティウスとアベラール：力

ポエティウスの『命題論』翻訳と註解は、ラテン語圏の註解の方向に特殊な圧力をかけることになった。まずは翻訳において、アリストテレスが名詞と動詞の例として「健康」(ὑγίεια)と「健康になる」(ὑγιαίνει)をあげているにもかかわらず、これを「走り」(cursus)と「走る」(currit)に替えている(16b8)。これはおそらくは動詞の「行為」的な性格を目立たせるためであろう。この訳語は後にメルベケのギヨームが新訳において「健康」(sanitas)と「健康になる」(sanat)に改めたのであるが、それ以後のトマスもオッカムも註解の底本としてはポエティウス訳を使い続けた。

その自らの翻訳に対するポエティウスの註解は、動詞の「表示」と「力」という二つの性格のいずれをも強調するものである。実はアリストテレスは動詞が「併示」ではなく「表示」するものを例えば「行為」のように特定していないのであるが、ポエティウスは『命題論第二註解』において「動詞は第一義的には作用(actus)と被動を表示し、作用と被動とともに時間の力をも伴う」⁴⁾としている。その一方でポエティウスは動詞あるいは述語が「命題の力」(vis propositionis)あるいは単に「力」をもっているということを次のようにして説明している⁵⁾。

2) και ἔστιν αἰεὶ τῶν καθ' ἑτέρου λεγομένων σημείων (et est semper eorum quae de altero dicuntur nota). Aristoteles (a Boethio translatus, Meiser), *De Int.*, 16b7.

3) ἀνάγκη δὲ πάντα λόγον ἀποφαντικὸν ἐκ ῥήματος (necesse est autem omnem orationem enuntiativam ex verbo esse vel casu). Aristoteles (a Boethio translatus, Meiser), *De Int.*, 17a9-12.

4) Nomina enim significant tempus, verbum autem cum principaliter actus passionesque significet. Boethius, *In PH II.*, Lib. 1, Cap. 3, p. 66, 12-14.

5) ただしポエティウスは接続詞にも「命題の力」があるとしている。周藤多紀「ポエティウスにおける論理と文法」によれば、動詞と接続詞の両方がもつ「命題の力」とは真偽の条件付けの機能という論理的な力のことであり、ポエティウスの註解においては文法と論

これら仮定的あるいは条件的とかと言われる命題においては接続詞が命題の力をもっているように、単純命題においては述語が力をもっている。したがってギリシア人たちもこのような命題すなわち単純な命題を、述定的と呼んでいるのである。これらにおいては述語が命題全体を維持しているのである。それゆえにアリストテレスは単純命題は「動詞あるいは変化形から」なると言ったのである。なぜなら述定的な命題全体を含むものすなわち述語がなければ、命題は成り立たないからである。(中略)主語項は述定的な命題を維持せず、述語だけが維持するからである。述語は命題全体を固有の力によって確立させるのである⁶⁾。

アベラールもこのような動詞論を受け継いでおり、『イングレディエンティブス』の「命題論註解」では次のように言っている。

なぜならここで彼が意図している述定的な命題においては、動詞が最大の力をもっているということを示しているからである⁷⁾。

3 トマス：文の形相的な部分

13世紀に入って事情は一変した。トマス・アクィナスの『命題論註解』については多くの研究が蓄積されているが、中でもトマスが「完結した文における動詞の機能の中から ESSE の意味を探る」⁸⁾という指摘は重要である。すなわちトマスは文が成立する根拠を、「ある」(est) が現実性 (actus, actualitas) を表示することと解釈した⁹⁾。これは動詞は作用 (actus) を表示

理の連続性が認められるという。

6) Et quemadmodum in his, quae hypotheticae vel condicionales dicuntur, coniunctiones propositionis vim tenent, sic in simplicibus propositionibus praedicatio vim optinet, unde et Graecae quoque tales propositiones praedicativae dicuntur, scilicet quae simplices sunt, quod in his totam propositionem optineat praedicatio. atque ideo Aristoteles ait ex verbo vel casu fieri simplicem enuntiationem. nam praeter id quod totam continet propositionem praedicativam scilicet, id est praeter praedicationem, enuntiatio non fit. [...] non enim praedicativam propositionem subiectus terminus tenet, sed tantum praedicatio, quae totam enuntiationem propria virtute confirmat. Boethius, *In PH II.*, Lib. 2, Cap. 5, p. 105, l. 4-31.

7) Ex qua vim maximam in propositione praedicativa de qua intendit, verbum habere monstrat. Abaelardus, *Die Logica ‚Ingredientibus‘*, 3. Die Glossen zu Περί ἑξιμηνείας, p. 351, lin. 23-28.

8) 長倉久子『トマス・アクィナスのエッセ研究』50頁。

9) 古館恵介『「命題論」註解史の中のコブラと現実性』参照。

するというポエティウス以来の解釈の帰結である。

しかしトマスもまた動詞が表示とは次元の異なる性格をもっていることを認識していた。そのことをトマスは「文の主要な部分・形相的な部分」という言葉で表している。

先に言われた通り、動詞は他のものに述語づけられるものどもの印である。また、述語は命題の形相的な部分、すなわち命題を完結する部分であるがゆえに、命題のより主要な部分である。(中略) それゆえ、より主要でより形相的な部分としての動詞のほうについて言及したのである¹⁰⁾。

このようにトマスに至って「力」という用語は消滅し、代わって「文の主要な部分・形相的な部分」という言い方がなされるようになったのである。その原因は当時の翻訳の状況にあると考えてみたい。トマスの時代には、ポエティウス＝アベラールとは系譜の異なる、「力」という用語を使わないアンモニオスの『命題論註解』の翻訳が流入している。

名詞は単独で述語づけられるものではないし、何らかの動詞すなわち「ある」や「あらぬ」のような、文を完成させるようになっている動詞なしにそれ自体で常に述語となるわけではない。これに対して動詞はそれ自体単独で固有の能力 (potentia) を保っており、常に述語づけられるということが生じる¹¹⁾。

これは哲学者ボルピュリオスが言ったことであるが、命題文のうち、述定的な種類においては、述語づけられるものあるいは命題のあるかあらぬかを表示するものが最大度に主要性をもっている¹²⁾。

10) Sicut supra dictum est, verbum est nota eorum quae de altero praedicantur. Praedicatum autem est principalior pars enunciationis, eo quod est pars formalis et completiva ipsius. Unde vocatur apud Graecos propositio categorica, idest praedicativa. Denominatio autem fit a forma, quae dat speciem rei. Et ideo potius fecit mentionem de verbo tanquam de parte principaliori et formaliori. Thomas, *In Peri Herm.*, Lib. 1, lectio 8, n. 9, Marietti 96.

11) Sed illa [nomina] neque sunt eorum quae praedicantur tamen et semper neque praedicta per se sine verbo aliquo, puta sine est vel non est, nata sunt perfectam facere orationem, verba vero propria salvantia potentiam per se tamen et semper praedicari accidunt. Ammonius, *Commentaire sur le Peri hermeneias d'Aristote*, Cap. 3, p. 94, 29-37.

12) Quae ait philosophus Porphyrius, quod in categorica specie enuntiativae orationis

アンモニオスは述語が「最大度に主要性をもっている」と言っている。トマスもまた「命題の主要な部分」と言っており、アンモニオスの影響が見て取れる。

4 オッカム：主語と述語とコプラ（繫辞）

さらに後の世代のウィリアム・オッカムの『命題論註解』には、「力」も「主要な部分・形相的な部分」も出てこない。オッカムも動詞がなければ命題が成立しないということを認めているが、以下のように単に「動詞がなければ文ではない」ということを繰り返すだけである。

彼はこの結論を次のようにして証明する、すなわち、もし人間の定義「動物、陸棲、二足」が言われても、そこに「ある」や「あった」や何らかの動詞あるいは動詞の変化形が付加されなければ命題的な文は得られないからであると。したがってもし単純な発言が動詞あるいは動詞の変化形なしに言われたなら、それは命題的な文ではないのである¹³⁾。

このようにオッカムは、動詞に「力」があるのか、それとも動詞が「主要な部分・形相的な部分」であるのか、こうした点には全く言及しない。ではオッカムは命題の成立をどのように説明しているのだろうか。オッカムは次のように言う。

すべての命題は少なくとも主語と述語とコプラ（繫辞）から構成されている¹⁴⁾。

知られなければならないことは、命題はある種の結合であって、それ自体で一つのものなのではなく、主語と述語と、あたかも主語を

principalitatem habet maxime quod praedicatur velut significans existentiam vel non existentiam enuntiationis. Ammonius, *Ibid.*, Cap.5, p. 133-134, lin. 57-72.

13) Et probat hanc conclusionem, quia si proferatur definitio hominis, puta talis 'animal gressibile bipes', si sibi non addatur 'est' vel 'fuit' aliquod verbum vel casus verbi, non habetur oratio enuntiativa. Igitur multo magis si simplex dictio proferatur sine verbo vel casu verbi non esset oratio enuntiativa. Ockham, *In Peri Herm.*, Lib. 1, Cap. 4, § 3, p. 392, lin. 2-9.

14) Omnis propositio componitur ex subiecto et praedicato et copula ad minus. Ockham, *In Peri Herm.*, Lib 1, prooemium, § 6, p. 354, 66-67.

述語に結びつけるようなコブラからなる集積であるということである¹⁵⁾。

このようにオッカムは、すべての命題を主語と述語とコブラからなる集積と見なした。ではなぜオッカムは動詞の固有性を論じなかったのか。それはおそらく、オッカムが自らの論理学の出発点として、『命題論』由来の名詞と動詞ではなく、『分析論前書』由来の「項」を採用したからであろう¹⁶⁾。『大論理学』I部1章に引用される『分析論前書』では、命題が主語項と述語項とコブラによって構成されると言われている。

アリストテレスは『分析論前書』1巻(24b16-18)において項を定義して、「私が項と呼ぶものは、命題がそれへと分解されるところのものである。それは述語と、『ある』や『あらぬ』が付加されたり取られたりすることによってそれについて述語づけられる当のものである」と言っている¹⁷⁾。

このようにオッカムは項を命題の基本単位を見なした。こうして、12世紀に再移入された『分析論前書』が、数世代をへて『命題論』の解釈をも一変させたのである。

5 存在と本質の区別

以上のような論理学における解釈の相違は形而上学あるいは神学にも反映されている。オッカムは『大論理学』においていわゆる「存在と本質の概念的区別」の立場をとったのであるが、その際に存在と本質の文法的な性格に言及している。

それゆえ、本質(entitas)と存在(existentia)は二つのものではないと言われなくてはならぬ。むしろ、「存在するもの」(res)と「存

15) *Intelligendum quod propositio est quoddam compositum non tamquam per se unum sed tamquam aggregatum ex subiecto et praedicato et copula quae quasi unit subiectum cum praedicato.* Ockham, *In Peri Herm.*, Lib. 1, Cap. 2, §4, p. 389, lin. 17-19.

16) 清水哲郎『オッカムの言語哲学』第1章参照。

17) *Definiens enim terminum Aristoteles, I Priorum, dicit: "Terminum voco in quem resolvitur propositio, ut praedicatum et de quo praedicatur, vel apposito vel diviso esse vel non esse".* Ockham, *Summa Logicae*, I, Cap. 1, p. 7, lin. 6-8.

在する」(esse) という語は同一のものを表示しているのであり、ただ一方は名詞として表示し、他方は動詞として表示しており、同じ働き (officia) を持っていないことから、一方が他方の代わりに置かれることが適切であることができないのである¹⁸⁾。

この発言からすると、オッカムは機能の次元と表示の次元とを区別していたのであろう。それゆえオッカムにとっては、働き (officia) において異なる二つの語が同じものを表示するということは特に不都合ではなかったのである。

これに対して「存在と本質の實在的区別」の立場をとったと後世に評価されたトマスは『神学大全』において次のように言う。

すべての被造物において、本質 (essentia) はその存在 (esse) とは異なり、そして可能態が現実態に対するような関係にある¹⁹⁾。

ここでトマスは文法には言及していないが、存在と本質の区別は人間の言語に依存する文法的な働きの区別ではなく、それ自体の側にある区別であると考えていたであろう²⁰⁾。

以上のように、動詞についての解釈の相違は『命題論』註解という局地的な問題にとどまらず、形而上学あるいは神学の中心部分にも食い込んでいた。にもかかわらず「力」や「働き」という言葉が文法用語として定着せず、その発想自体も埋もれてしまい、バンヴェニストの再発見をまつことになったのは惜まれることであった。

一次文献 (原著者年代順)

『命題論』の引用は現行ギリシア語校本からボエティウスのラテン訳に合致する読みを採用して構成した。

18) Ideo dicendum est entitas et existentia non sunt duae res, sed ista duo vocabula 'res' et 'esse' idem et eadem significant sed unum nominaliter et aliud verbaliter; propter quod unum non potest convenienter poni loco alterius, quia non habent eadem officia. Ockham, *Summa Logicae*, III-2, Cap. 27, p. 554, lin. 22-27. 訳文は渋谷克美『オッカム哲学の基底』(36-37頁)から引用した。

19) In omni autem creato essentia differt a suo esse, et comparatur ad ipsum sicut potentia ad actum. Thomas, *ST*, I, q. 54, a. 3.

20) 渋谷克美『オッカム哲学の基底』第1章はオッカムとトマスの立場を心の内の区別と外の区別という対比で整理している。

- Platonis Opera, t. 1, recognoverunt brevique adnotatione critica instruxerunt E.A. Duke et al, Σοφιστής, Oxford Classical Texts, 1995.
- Aristoteles, *Categoriae et Liber De Interpretatione*, ed. L. Minio-Paluello, Oxford Classical Texts, 1949.
- Aristoteles Latinus II, 1-2, *De interpretatione vel Periermenias*, translatio Boethii, specimina translationum recentiorum, edidit Laurentius Minio-Paluello, translatio Guillelmi de Moerbeke, edidit Gerardus Verbeke, revisit L. Minio-Paluello, Desclée De Brouwer, 1965.
- Ammonius, *Commentaire sur le Peri hermeneias d'Aristote*, traduction de Guillaume de Moerbeke, édition critique et étude sur l'utilisation du commentaire dans l'œuvre de Saint Thomas par G. Verbeke, 1961.
- Anicii Manlii Severini Boetii, *Commentarii in Librum Aristotelis PERI ERMHNEIAS*, ed. Meiser, Teubner, 1877 (*In PH II.*).
- Peter Abaelards Philosophische Schriften, *Die Logica ‚Ingredientibus‘*, zum ersten male herausgegeben von Bernhard Geyer, Verlag der Aschendorffschen Verlagsbuchhandlung, 1919.
- Sancti Thomae Aquinatis, *In Libros Peri Hermeneias et Posteriorum Analyticorum Expositio*, ed. M. Spiazzi, Marietti, 1955 (*In Peri Herm.*).
- Sancti Thomae Aquinatis, *Summa Theologiae*, cum textu ex recensione Leonina, vols. I-III, cura et studio Petri Caramello, Marietti, 1952-56 (*ST.*).
- Guillelmi de Ockham Opera Philosophica 1, *Summa Logicae*, St. Bonaventure, N. Y., 1974.
- Guillelmi de Ockham Opera Philosophica 2, *Expositio in Librum Perihermenias*, St. Bonaventure, N. Y., 1978 (*In Peri Herm.*).

二次文献

- 渋谷克美『オッカム哲学の基底』（知泉書館，2006年）。
- 清水哲郎『オッカムの言語哲学』（勁草書房，1994年）。
- 周藤多紀「ボエティウスにおける論理と文法」（京大中世哲学研究会『中世哲学研究』第25号，2006年）。
- 長倉久子『トマス・アクィナスのエッセ研究』（知泉書館，2009年）。
- エミール・バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』（岸本通夫監訳，みすず書房，1983年）。
- 古館恵介『『命題論』註解史の中のコブラと現実性——ボエティウスからスコトゥスまで』（中世哲学会『中世思想研究』第60号，2018年）。